

平和の尊さを後世に伝える 慰霊巡拝に参加して

浜松市遺族会 大石紘司

私は終戦3年前、昭和17年生まれ。父は私が二歳の時出征し、フィリピン、マスバテ島にて33歳の若さで戦死しました。私は父の顔を知りません。

当時、姉は6歳、妹は生まれたばかり。父はさぞ、戦況の厳しい時世とはいえ、家族を心配し、後ろ髪をひかれ出征したものと思います。母は20代で戦争未亡人となり、苦勞に苦勞を重ね、私達（兄姉妹）3名を立派に育て成長させてくれました。感謝あるのみです。

立派な母でした。その母も13年前に父の元へ旅立ちました。

私は、日本遺族会主催による「フィリピン慰霊友好親善訪問」に参加する機会を得ました。

父は19年11月24日朝、レイテ島上陸を目前に敵機に発見され、グラマンの攻撃を受け、応戦するも一弾を艦の中央部に受け、満載した爆薬、弾薬に引火し大破炎上、隊長以下34名と共に戦死と聞いています。マスバテ島の山中に埋葬されていると思います。

お国の為に戦って亡くなった父を誇りに思うと同時に、父のことはずっとこの胸から忘れた事はありません。当時の生々しい出来事が、実際に戦没地を訪れ、万感胸に迫り感無量でした。私達は、この不幸な歴史を深く心に刻み、平和と安全、そして自由と繁栄を享受している事を改めて心に噛みしめ、「国家が平和でなければ国民の幸せはありません」、あの痛ましい戦争を風化させず、平和の尊さを後世に伝えていく努力が必要です。（恒久平和）

祖国の礎になった246万柱の英霊の犠牲の上に築かれていることを決して忘れてはなりません。

比島戦跡巡拝団に参加して

浜松市遺族会 小倉てい

私は43年、日本遺族会の比島戦跡巡拝団に加わり、20数年前、私共の肉親が踏んだであろうこの土を、夫の最後の地を確かめに来ました。

このバナナや椰子の果物がたわわに実る平和な島にかつての激戦があり、栄養失調で亡くなった多くの方々に対して、何とも言えない気持ちが一杯で、唯々内地より持参の好物を供えて冥福を祈るのみでした。大きな声で夫の名を呼んでも、空しくこだまが返って来るばかり・・・小石を袋に一つ、一つ、涙の跡を残してミンダナオの形見として持ち帰り、遺族の方々にお分けして、共に泣いたものでした。

今まで日本人の墓らしい物も無く、全く惨めな思いでしたが、再び訪れた昭和48年、ルソン島カリラヤの地にマルコス大統領のご厚意で慰霊碑が出来上がりました。この時、浜松市長さんにお願ひし、浜松出身の全比島の戦没者名をお書き頂き、お花と共に墓前に供えて、謹んでご冥福をお祈り致しました。

台湾慰霊行

浜松市遺族会 井村俊一

「時は、すべてを恩讐の彼方へ流し去れり。いまは只、真蒼なる、バシーの海にねむれる 幾多の御霊安かれと、安かれとこそ祈るなり」

この碑文は、台湾の最南端に近いバシーの海を見下ろす猫鼻頭（ビョウビトウ）に新しく建てられた戦没者慰霊堂前にある、観音座に書かれたものです。

私は誠に適切な文句だなと思いながら、み霊のご安泰を祈り続けました。

澎湖島から比島へ向かう日本船団はどうしてもこのバシーの海を通らねばならなかった。敵の大抵抗をくぐって比島に向かう多くの船は敵の魚雷や爆撃を受け爆死する者、海に飛び込む者、船と運命を共にする者、その数を知らず、悲壮そのものでした。

現地の方の話によると、戦争当時は、バシー海岸一帯は、多くのつわ者共の屍が打ち寄せられたとの事、さもあらんと思いました。

バシー及び台湾方面でお亡くなりになった勇士の在りし日の面影を偲びながら、心ゆくまでのご冥福を祈り続け、ご安泰を願った。

戦跡巡拝 サイパン、テニヤン方面の慰霊巡拝の旅

浜松市遺族会 袴田きよ

かつて、数万の日本人によって開拓された製糖産業と共に栄えたサイパン、テニヤン、グアム島も、太平洋戦争によって悲惨な玉砕の島となり、20 数万の尊い生命が失われました。この地に4日間、6名の僧侶のお伴をして慰霊巡拝の旅に出かけました。

珊瑚礁に囲まれたサイパンの海の色はあくまで青く、絵の具を溶かした様な美しさ。

そしてサイパン桜の燃える様な真紅の鮮やかさは、かつてのむごい戦いがあったとも思われぬ美しい南国の島でした。

島では数か所で慰霊を行いました。中でもバンザイクリフでは、立派な花々と共に内地より持ち込んだ数々の好物の品々を供えて、盛大な慰霊祭が行

われました。3万人の人々を呑みこんだこの崖、一時は海の色も血に染まった
ということです。一番日本に近いこの地でバンザイを叫び、祖国の繁栄を願っ
て肉親の面影を偲びつつ、最後をとげられた方々の心情をお察しする時、胸を
えぐられる思いでした。

次の日テニヤンに渡り、慰霊祭を行ないましたが、戦時中そのまま、草ボウ
ボウ、ジャングルは生い繁り、山は艦砲のためその形も変わってしまったとい
う激しい砲撃の跡。陸海軍本部も無残な残骸をさらして、戦いがいかに空しい
ものであるかを物語っていました。四本の滑走路はジャングルの中にそのまま
残され、日本の敗戦のきっかけとなった原子爆弾の地下貯蔵庫の跡も記念碑が
建てられており、当時の日本軍の日の出神社は朽ち果て、哀れみを誘っており
ました。

昼食をとり数々の珍しい食物を頂きながら、兵士達の口にはこの一かけらも
入る事はなかったことだろうと思うと胸の詰まる思いでした。

もし事情が許したら、一度は肉親の最後の没地におでかけ頂きたいと思いま
す。

戦没者の御冥福をお祈り致します。

歌集「ルソンの小石」より

浜松市遺族会 榎木淑子

送り来てひとりの室に軍国の妻の覚悟を日記にするす
命あらば遂にまみゆる日もあらむ庭の梧桐葉音立てて落つ
英霊を負ひて生き来しわが生も子ら育ちゆき虚しきか今
灌木と羊齒原つづく山脈に憚らず呼ぶ亡夫の名久に
山奥に餓死せし事実疑へず怒りに耐へて我は祈りぬ
ルソンの小石遺族らに配りくり返す巡拝談も板につきたり
比島山麓の墓標にと蒔きて来し朝顔は如何なる花をつけしや
戦争を知らぬ世代とかみ合わず嘆くが愚かか我ら遺族ら
「さくら散る日に」

- ・背丈大きくすすくと 一人一人が君に似て いと頼もしく育ちたり
皆のやさしき心根に 守られまもる楽しき我が家
- ・さくら散る日に靖国の みたまに詣で語らいぬ 荒き波風今日も越え
高きいさおしたたえつつ 栄ある祖国築かんわれら
- ・とつ国々の果てまでも 平和の光輝きぬ 自由の花は咲き匂い
生きる喜び充ち充ちて 今こそ仰ぐ靖国の神

わが町の慰霊祭

浜松市遺族会 友田 宏

毎年、秋の彼岸日になるとわが町では戦没者慰霊祭が行われる。空襲で受難された霊も一緒に追悼される。神社の境内で式典が準備される時、風が吹き鎮守の森は騒めき靈感を覚える。亡き人々の懐かしい面影が浮かんだ。少年兵だった霊魂は早くから梢に止まり式を待っていた。

慰霊碑の前に御供物が並べられ、御詠歌を捧げる老婆達が「般若心経」「靖国和讃」の教本を手にして正面に座すと、騒めきが鎮まり式が始まる。自治会長の挨拶が心静かに述べられる。昭和40年以来引き継がれる『わが町の英霊』に捧げる言葉である。黙禱に頭を垂れる遺族の胸中は彼岸の日の仏門を想う。亡き人を英霊と呼び、神となりしが。母は、妻は、果して我が子が、わが夫が、仏の世界で迷いを脱し、悟りの境地にはいつているだろうか・・・神仏混こうただひたすらに哀惜を追う。

戦後の一時、戦没者を慰霊する行為を戦争に結び付けると考え、タブー視された時期がありました。戦争の悲惨さを一番強く浴びたのは戦没者とその遺族でありましたのに。世情は薄情にも悲しみの遺族をあたかも戦争協力者であったかの如く冷淡にみて拒んだ。

わが町の有志は、そんな時代の風潮の中で氏神境内に慰霊碑を建立、そして毎年秋の彼岸日には町主催の慰霊祭を取り決め行っている。町は政治や思想に全く関係ない立場で施行する。

あの大戦中、町の若者は次ぎ次ぎ軍に召集された。

ある壮者は「我々は町の代表として来攻する敵を撃破、立派にご奉公を務めて参ります」と神殿に誓った。これに答えて「銃後の守りは心配するな」と町民が拳って見送った。そのわが町の勇士らは、数か月後には輸送船上で敵潜水艦に襲撃され海没したと云う。

又健気な若者は南洋の島で壮烈な戦死を遂げた。妻子を持つ兵士は酷暑のジャングルの中でさまよい飢えと救いを祖国に求め、郷愁に涙を流し息絶えた。シベリアの寒地や中国大陸で眠っている者もいる。総てが戦禍がなした非業の死であった。

わが町の戦没者 54 柱、空襲受難者 5 名 の尊い犠牲をいつまでも忘れずに追悼する。

国破れて山河在り、英霊たちを追悼する人も年々減り淋しくなりつつあります。昨今、わが町では純粋な真心で郷土戦没者の慰霊顕彰を心掛け、正しい史跡を後世に伝え残さんと「碑」を護持している。その精神は戦争への警鐘と平

和への願いが秘められている。

戦中戦後の労苦

夫亡き後、子供の寝顔に 負けられない！ 浜松市遺族会 館つる

昭和18年、寺の住職であった夫は赤紙、召集令状を受け、出征して行きました。14歳を頭に末は乳飲み子で、5人の子供を抱えて苦悩の日々が始まりました。寺の留守を守る私は収入源を断たれ、日常生活は一変。慣れない農作業や土木工事の日雇に出たり、野菜の引き売り等、その日の糧を得る為に朝は三時起き、寝るのは12時まで、働きづめの毎日で生活を支え、暮らしも大変でした。

災難は追い打ちをかけるように、昭和18年5月19日終生忘れられない恐怖の日でした。それは浜松方面へのB29の爆撃により、寺の本堂、庫裡くりに至るまで屋根と柱を残すのみで、建具、家具、ガラス戸等が吹き飛び、大きな被害を受けました。一時は呆然とし、なすすべも忘れ、何から手を付ければ良いのか気抜けし途方に暮れる毎日でした。

気を取り直し、残った柱に拾い集めた戸板やむしろで囲い、雨露を凌ぐ急場の生活を始めました。しかし、その翌年本当に悲しい知らせが届けられました。それは夫の戦死公報です。無事の帰りを固く信じていた私は、口では言い表せない衝撃であり、もう半狂乱、その場に大声で泣き崩れ落ち身動きできませんでした。

気を張りつめ頑張り続けた気持ちも砕け、何度か子供を道連れに死を考えました。しかし、子供達の寝顔を見、将来に思いを馳せ、これではいけない駄目だと、負けてはおしまいだと気を取り直し、全身全霊、歯を食いしばり懸命に働き続け、今日まで生き延びることが出来ました。

更に長男が亡くなり、重ねての悲しみはありましたが、他の子供達は何とか健在で成長し、幸せな日々を過ごさせて頂きました。

長い年月を振り返り、戦争の悲惨さ、苦しみ、悔しさ、情けなさ等、体験から多くを学びました。

他人に対する思いやりと報恩感謝の心を身につけさせてもらいました。しかし、「こんな時」「あんな時」夫がいれば、「お父さん」がいればと何度思ったことか数えきれません。「嗚呼、お父さん」「嗚呼、お母さん」とある時は声を出し、ある時は心の中で小さな声で叫び願いました。そして尽きない願い、二度と戦争はしないで、戦争はやってほしくない、戦争はやらないで下さい。

「 合 掌 」

父との思い出とフィリピン慰霊巡拝の旅 浜松市遺族会 川合康彦

私は終戦当時、小学校六年生でした。空襲や艦砲射撃等を実際に体験しました。

父は逓信省の職員であった。業務に精励され、電話の自動交換機改良により逓信大臣表彰を受けました。その時の金一封をそのまま陸軍省に寄付、当時の東条英機陸軍大臣から署名入りの感謝状を受けました。金一封を自分や家族の為に使うこともできたはずだが、厳しい戦局にあった日本の為に役立てて欲しいと考えたのではないかと思います。

中国への長期出張の際には、家族にお土産を買って帰ってきました。人として、又父親として大変立派で、常に周りの事を考え、接してくれました。家族は皆、心から尊敬と誇りに思っていました。

父は昭和20年5月11日フィリピンルソン島「ヌエバビヤヤサラトレ」にて戦死。

愛する妻や子供を残し異国の地に赴くのは大変辛く、やるせない気持ちであったと思います。しかし、祖国、家族を守る為に、男として自分が戦わなければならないと、自ら志願し、通信技手として従軍する。敵地に向かう輸送艦が敵の攻撃により沈没、溺れて亡くなる兵隊さんが多い中、泳ぎ続け、島に辿り着くことができた。上陸後は、第14方面司令軍の指揮下にてフィリピン全島の電気通信業務のため各地に分遣された。その後次第に各所で友軍の敗北が続く、憲兵隊と共に行動していたが、ラトレの地で戦死。昭和21年2月戦死公報が家族のもとに届いた。

定年退職後、日本遺族会の慰霊友好親善事業に参加させて頂きました。初の海外旅行でした。以前にも海外へ行く機会 was ありましたが、まずは父の眠る戦地で慰霊をしなくてはとの思いが強く、海外出張には行かなかった！。訪問では各激戦地での慰霊祭の他、現地の小学校への親善訪問があり、小学校へ行きました。出迎えてくれた校長先生が日本語で「愛国行進曲」を歌ってくれた。北部地方は早い段階で日本に占領されており、穏やかな統治がされたため親日的な人が多い。校長先生との会話の中で、日本軍憲兵隊司令部の跡地について伺うことができた。古いスペイン風の大きな邸宅だが、一部が爆撃で破壊されたままになっており、戦闘の激しさを物語っていた。父はこの地で戦死されたのではないかと……。実際に戦没地に立ち、慰霊できることは稀で、亡き父

が呼んでくれたのではないかと思ひ、心ゆくまで積年の思ひを伝え涙しました。

現地の人々、戦後米軍は遺骨収集に来たが、旧日本軍はまだ来ていないと言っている。現在も遺骨収集活動は続いているが、いまだ多くの遺骨が、日本に帰ることなく遠い異国の地で眠っている。祖国を守る為散華された遺骨が忘れ去られ、放置されたままになるような事があってはならない。英霊を忘れ去る事は、日本の歴史や日本人である事を忘れる事に等しく、このままでは日本人が日本人でなくなってしまう。

英霊の御霊が祖国のない亡霊にならない為にも、国は全力を挙げ遺骨収集事業に取り組むべきである。そして、国民も英霊への感謝と尊崇の念を持ち続けることが大切です。

出征前夜日章旗を母に託す

父との思い出と戦没地への慰霊に参加して

浜松市遺族会 鈴木利協

父は昭和19年11月満州の海拉爾（ハイラル）地区に出征。翌年8月13日戦死、終戦の2日前です。安否が戦後八年間も不明でした。母は、ラジオの尋ね人相談や復員船の全ての港や戦友の方々に消息探しをしたものの、手掛かりは掴むことが出来ませんでした。昭和28年に戦友が知らせてくれた事にて、ようやく戦死が分かりました。

昭和20年に入ると首都圏も空襲が激しくなり、母は幼い私を連れ、横浜から実家の浜松へ疎開しました。父の安否不明の八年間を含め、本当に辛い時であったかと思ひます。母は、戦中・戦後の労苦は多くを語りませんでした・・・。

私の名前は、母が出征された夫が生きて帰って来て欲しいと願ひ、幸運を呼び込むとの思ひから「八紘一字」の「一字」と名付けました。八紘一字は本来、世界を一つの家のように平和にするの意味がある。当時は改名する事で出征した人が帰って来ると願掛けすることがあったのです。戦後「一字」から「利協」に改名。

父は出征時日章旗を母に渡した。これは絹製の日の丸に太筆で「必勝」の文字を母の父親が揮毫したもの、「無事に帰って来て欲しい」と親族、友人、知人等大勢の方がその祈り願ひを込め署名、通常は戦地にお守りとして持っていくが、「自分はもう生きては戻れない」と悟り、母に託した。子供を頼む、どんな気持ちだったでしょう！

私は慰霊友好親善事業に参加し、中国東北部ハイラルを訪れました。ハイラ

ルは草原で身を隠すものもない所で、日本軍の掘った壕にも入ってみました。戦うための武器もなく、水や食物なく、戦病死した人が多く、「勝って来ると勇ましく」と送り出しても実際は、食糧、武器、弾薬もなく飢え死にという悲惨な状況だった。戦友の方からは「決死隊に入り、散華」の文字が弔辞にはあるが、本当に銃弾に倒れたのか、確かめる術もない。父の遺骨はなく、「石ころが一つ入っているだけ」だった。

母は若い頃から短歌作りが好きで、靖国神社の広報に幾度となく掲載された。母の百歳の歌集「紅（くれない）」を編んだ。タイトルは母が自分で書いた色紙「紅」を部屋に飾っていたことから、母の古風で内に秘めた情熱を表した生き方を感じ決めた。（日の丸の色）「紅」は日章旗を託していった父のことも表しているのではないかと思う。母は百歳の長寿でした。戦死した父の分まで長生きさせて頂いた。父の分まで生きなければと頑張った。

私は父の顔も声も分からない。父親がいない、これが逆にバネになり頑張りぬいた面もある。平和への思いを次世代に語り継承する責務があり今後共取り組んでまいります。

父の望みを守った母

浜松市遺族会 富田健太郎

終戦後の昭和 21 年 3 月、父親は中国、湖北省にて 34 歳の若さで戦病死しました。当時母 29 歳。長女 6 歳、長男（私）3 歳が残されました。

母親は祖父母と共に、田舎のたばこ、日用雑貨の店を営んでいました。店の収入だけでは苦しく、自転車で行商し、裁縫の内職もしていました。当時、店の仕入れの資金繰りに苦労している様子を子供ながらに感じて、欲しいものも口に出せないこともありました。

父親は昭和 19 年南京に渡り、中国の戦地からの軍事郵便が 200 通余りあり、その中で私の母に『子供の養育に万全を期せば、お前の使命は他にない』との文面より、教育熱心になったでしょう。

進学率が高校 30%、大学 10%以下の時代、私を奨学金を受けながら、高校、大学まで進学させてくれて、父からの指示をしっかりと守ってくれました。家計を切り詰めながらの生活、今思い出すと本当に頭が下がります。

私が結婚し、嫁が店を手伝ってくれるようになり、肩の荷も下りたことでしょう。85 歳を過ぎるまで店を手伝っていたと自負していました。

年を重ねるうち、娘、嫁にも先立たれて、さぞかし寂しい思いもしたでしょうが、5 人の孫、それぞれに 2 人の曾孫 10 人にも恵まれ、誕生日、敬老の日

にお祝いを貰って喜んでいました。子育ての大変な頃の苦労も報われました。

最後まで大病一つせず、102歳の天寿を全うでき、天国で親父にお疲れ様と迎えられたことでしょう。

母に感謝、戦後の生活は・・・

お寺の奥様の一言が幸の路となる・・・ 浜松市遺族会 伊藤信吾

父母は、入野村で6帖と2帖の借家で居住し、結婚生活はたった2年でした。戦時中、父はラバウルに配属されたが昭和19年戦闘中に戦死。

戦後の生活は、空爆で爆弾を落とされた穴は長い間埋められず、大きな水溜りが池となり、子供達で住みついていた「アメリカザリガニ・・・」を捕え、茹でて食べるととても美味しかった。大きなバケツ一杯取ったことがあり、それが嬉しかった思い出がある。

父の遺骨を市役所か公会堂に受け取りに行きました。母は「白い箱」を受け取り、栄町の下がる坂の途中で「箱を抱いて」暫く泣いて動くことができなかつた。今でも心に残っています。

米国軍の報復措置として「軍人恩給、遺族年金の支払い停止」があり、母は無収入となり、食材入手も出来ないので、畑を借りて「蕎麦、芋、とうもろこし」等を作ったが、役人の配給を止めるの一言で無しになりました。ある時、兄弟は芋を食べたが、母は水を飲んで腹を膨らませた・・・と言っていました。この時、母には「恩返し」をしなければいけないと子供心に誓いました。着ているものは継ぎはぎの洋服でした。

お寺の奥様からの勧めがあり、母が専売公社に採用され、人並みの生活となり、我が家の最大の転機となりました。後年母は公社近くに自宅を新築し、持ち家生活となりました。母に助言をくださったお寺の奥様の一言が「当家の幸福への曲り角」になったと私は考えております。

周囲の皆様方に感謝し、苦労した母は101歳で父の処へ旅立ちました。

遺品（手帳）より 俳句で亡き母の叫び聞き

「遺影（父）言わず、わめきたくなる 秋の暮」

浜松市遺族会 高橋俊子

父はパプアニューギニアで戦死、27歳でした。食べ物もなく餓死でした、無念だったでしょう。

昭和19年9月30日、戦死の通知とともに空の白木の箱が届きました。母は

23歳で未亡人となりました。名古屋の自宅で父の死が家族に伝えられた。かすかに脳裏に残るのは、びしゃりと閉じられた障子の白さだという。訃報が読み上げられる瞬間部屋の外に出されたのは母の優しさだったのか、知るすべはない……。当時3歳だった私の髪を切って白木の箱に納めたそうです。

悲しんでいる間もなく、空襲の激しかった名古屋から祖母の実家のある浜松に移り住み、幼子二人を抱え働き続け、ついに体を壊した母を見兼ねた人が、私を養女に欲しいという話が出たそうですが、母はきっぱりと断り懸命に私達を育ててくれました。戦後の苦労話はあまり話さず、「親が苦しんでいる時は、子供もきっと苦しんでいるのだから」と常に前向きで明るい母でした。98歳で父の元へと旅立ちました。

しかし、遺品を整理している時に、手帳に「遺影言わず わめきたくなる 秋の暮」と母の俳句がありました。苦しい胸の内の叫び声、秘めた思いを知りました。いつ詠まれたものか分からない。それでも「父への気持ちをずっと抱えていたのですね。寂しかったんだなって……」

もう2度と悲惨で愚かな戦争を繰り返してはなりません。戦争を知らない世代が8割を占めております。今も世界各地で心痛むニュースが絶えません。平和を願って犠牲となった多くの英霊の魂の為にも、そして空しい戦争の悲惨さを風化させない為にも、平和の尊さを訴え続け、次世代に継承してまいりたい。

父の出征見送り「いい娘になれよ」と言い残す

戦後の母の労苦に感謝

浜松市遺族会 新村はる枝

父は昭和19年4月21日歩兵118連隊（静岡）に召集、出征しました。私は2歳で母におんぶされ見送りました。父の顔は覚えておりません。その時、父は私の頬に手をあてて顔をじっと見ながら「いい娘になれよ」と、母に頼むと言って出征して行きました。その時の父と母の気持ちを思うと、涙があふれ出てきます。

出征後は、母と私は本家でお世話になっていました。そこへ昭和19年9月30日戦死公報が届きました。マリアナ諸島テニアン島にて戦死。

父の遺骨引き取りの連絡があり、家族は悲しみ、どうして、何で、とやるせない気持ちで一杯でした。伯父が弟の遺骨は俺が迎えに行つて来るからと、私と母は、本家の家族みんなで待っていました。伯父が白木の箱を母に渡す時、死んでしまうことは、こんなに軽くなってしまうものか、と一言、涙を流しながら母に手渡しました。母も白木の箱を抱きしめたが、あまりにも軽くてびっ

くりしたそうです。箱の中には遺骨はなく、名前、死亡年月日、戦死場所、年齢だけ書かれた紙1枚が入っていたのみです。

母と私は、小学校六年生まで本家でお世話になりましたが、春休みになった時、伯父から、長男が秋に結婚するので、これからは2人で生活するようと言われてました。私は、大家族のなかから出て母と2人で生活出来るのが嬉しくて、母の不安な気持ちがその時は分かりませんでした。私は中学二年生の頃、母名義の田畑、山林がある事が分かりました（本家の面倒見、気配りに感謝）。母と一緒に田植え、稲刈りと、今思うと懐かしく思い出す事ばかりです。

母は、今年9月15日103歳になります。私は毎朝、神棚にお茶とご飯を上げる時、父の遺影を見ると、父が出征する時「いい娘になれよ」と言った父が、今では「いいおばあちゃんになれよ」と言っているように思います。

今、この先どんなに世の中が変わろうと、若い人達が赤紙1枚で戦場に行く事があってはなりません。戦争のない平和な国になってほしいと願っています。そして、今の平和と繁栄は、尊い犠牲の上に築かれた事を忘れてはならないと思います。平和の有難さは永久に語り継がなければなりません。5年前孫娘に、東京の武道館での全国戦没者追悼式にて、静岡県遺族代表（18歳未満）として献花を供えさせて頂き、この上ない無上の慰めと無上の喜びであり、感無量でした。今後共、恒久平和につながる慰霊や顕彰を続けてまいります。

戦後を生き抜いて 母と子の労苦と親子の絆

浜松市遺族会 吉田よしゑ

戦争遺児だった主人と結婚して、はじめてその大変さを知りました。戦前戦後、日本はどこの家も貧しく、父親のいない家庭は明日のお米にも事欠いた事でしょう。お父さん（義父）がいてくれたらなあと思うものです。

終戦の年に生まれた主人は、母親のお乳が出ず「棺桶」に足を突っ込んでいた子供時代でした。病弱で小学校の入学式にも行けず「いじめ」にもあいました。父親の生死も何年か後にソビエトの収容所で亡くなったとわかり、母親は両親の葬儀、亡くなった夫の葬儀と物入りな日々でした。

主人はよくご飯やおかずを一口だけ残しました。どうして？と聞くと、「明日の為にためとっておく。明日食えるか分からん。」と言いました。母親は日雇いに出たり、野菜の為の下肥えを下町までもらいに行きました。朝早く幼かった主人を荷車に乗せ、途中で買ってもらったバナナがとびきり美味しかったそうです。母と子の二人暮らしは貧しくとも楽しかったでしょう。母と子の絆は強

いものがありました。高校も定時制に通い親孝行な人でした。

その後高度成長期もあって印刷所を起業しましたが、下請け仕事で経営が安定する事はありませんでした。その後、ワープロが出て仕事がなくなってしまうしました。それでも主人は印刷の仕事を愛し、生涯一職工としてがんばり生き抜きました。苦労しながら共に働いた50年の歳月は私の良き思い出です。もうすぐ一周忌です。

戦死した叔父（幸吉）の生きた証

作文「昨夜の雨」より

浜松市遺族会 高林幸和

この文集（作文）は仏壇の戸棚から出てきたものです。これは戦死した弟の兄（和夫）が残しておいたものと思われる。叔父（幸吉）は、昭和19年3月5日、パプアニューギニア、ロスネグロス島にてアメリカ軍と激しい攻防戦の末、ハイン飛行場にて戦死。26歳でした。日本軍は、ロスネグロス島の所在人員は昭和19年5月31日をもって通信全く途絶し全員玉砕したものと見なし事務処理したと、防衛庁の戦時業書に記載されている。アドミナルテイー諸島ロスネグロス島での戦いの戦力は、アメリカ軍部隊45,116名、日本守備隊2,615名（歩兵229連隊戦死者384名）であった。

文集は積志尋常高等小学校・積志の葦第12号・発行昭和5年12月20日、尋常六年生（12歳）・「昨夜の雨」高林幸吉

だんだん夕方になって来た。僕はうちの手つだいをしていた。そのうちに雨が降りだした。ぴかぴか光った。ごろごろなりだした。びっくりして外へとびだして又とびこんで、お父さんに「雷がだんだんひどくなったのう」というと「この前もこんな空になって通りものがしたが、今日は通らねばよいが」といった。うちの子供はおっかないといって蒲団の中へもぐっていた。そのうちに雷がだんだんひどくなってきた。「西の方があんなに赤い。あれはひやうが降るしるしだ」と兄さんがいって戸をしめた。お父さんは煙草をかたずけるやら、お母さんは水をくみに行くやらで、僕の家はたいへんな騒ぎである。

雨は次第しだいに強くなってきたが雷は少し静かになったようだ。外へ出て見ると、空には黒い雲がある。家の中へ入って、夕食をすまして外へ出た時にはもう日本晴れであった。僕は思わず「ああよかった」とさげんだ。ぢきに床についた。夢にも雷のことを見て心ぼそかった。

当時の高林家の様子がよく表現されている作文と思います。

昔より長期にわたり品質の良い評判の煙草作り農家であった事を思い出し

ました。高林家の貴重な記録（宝物）として保存し、残してまいります。

又この他には戦地からの手紙があり、それには、故郷の秋風で一杯の黄金に輝く、田んぼの風景を偲ぶとともに、家族、親戚の人達への思いが込められた、とても一口では表せられない人情が深くつづられていました。

モンゴルへの遺骨収集派遣に参加して

「その靴の中にご遺骨・足の指の骨5個…発見」

浜松市遺族会 竹内 治

平成22年、比国（フィリピン）において遺骨収集によるある事件が発生しました。比国政府により遺骨収集の許可は出なく、中止、中断されたままです。太平洋戦争最大の激戦地の比国での遺骨収集の目途は立っておりません。そのような中、私は翌年モンゴルへの派遣が決まり、8月22日から17日間行くことになりました。

モンゴルのスンベル村、ここはノモンハン事件から始まった第二次世界大戦の戦場です。ノモンハン事件とは昭和14年5月から9月にかけて、モンゴルの最東部、中国の西部に位置するハルハ川を挟んでの国境紛争の戦場です。日本軍対モンゴル軍・ソ連軍との軍事衝突です。日本側はノモンハン事件と言いますが、戦死者双方で18,000人余・戦傷者は25,000人を上回っており完全な戦争です。どちらが仕掛けたかは今もってよく分からず、兵士の自殺者や行方不明が多いのもこの戦争の特徴です。

8月24日現地にて行動開始、まずはモンゴル日本人慰霊碑参拝、日本大使館訪問、現地説明を受ける。先ず医者なし、ホテルなし、食堂なし、水道なし、電気は中国から輸入時々停電、風呂、シャワーなし。夜は非常に寒い、ベッドは木製で毛布のみ、冬物を着て寝る。我々の宿舎は四人部屋、戦勝記念館です。食料は日本から持ち込んだ物を毎日変えて食べる。連日調査、試掘を繰り返すが手掛かりなし、遺骨が見つからない。

8月29日、今日も午前中手掛かりなし、午後になり3時30分、755高地付近にて遺骨、歩兵銃と一緒に出土する。色々な物が出る。先ず錆びたボロボロの歩兵銃、鉄の部分しか残っていない銃剣、革製の馬具、水筒、マッチ、石油缶、鉛、鉛筆、カミソリ、革靴、小銭入れ、ビール瓶、歯ブラシ、銃の弾、ボロボロの日章旗、旗白地は黄色に黄ばんでいる、そして「靴」。

その時、その靴の中に「足の骨」があるかもしれないので、良く見て下さいと言われ、はっとして中を探ると骨があります。足の指の骨です。指の骨五個

そして踵。なんと「七十年」もの間ここに居たのです。悲しいと言うのを通り越して、よくもまあこんな姿でと、ただただ呆然としてしまいました。この怒りをどこに向けたら良いのか、土の上に正座し只々頭を垂れお祈り、口の中で静かに語り、手を合わせ、人の愚かさ、醜さ、こんな辺ぴな所に、早く迎えに来れなくて御免なさい、さあ帰りましょう。

収集したご遺骨を宿舎に持ち帰るために、白い布製の袋に入れ、袋に書きます。「H22・8・29 午後、東バルシャガル、755 高地近く（GPSにて地点割り出し記録）全^{ぜんとうこつ}橈骨、^{せんこつ}仙骨、背骨、腕骨、^{すね}臑の骨、足骨」。記録を終えて、その場で声を出して呼び、叫び、お〜い、お〜いと大声で私達と一緒に帰りましょう、迎えに来ましたので出て来て下さい、お願いしますと叫び続ける。この戦場は若き田中角栄元首相も一兵卒として参戦したノモンハン事件の戦場です。

「父親も比国のルソン島バギオで戦死、未だに遺骨も遺品も何も帰って来ていません」遺骨を入れた白い袋を胸に抱き宿舎に帰ります。父親を抱いた気持ちになって無言の内に宿舎へ、そしてご遺骨を安置し、拝礼をし一日が終わります。

その後、何か所かを試掘調査、この日地中よりボロボロの地下足袋が出土。見ると「月と星のマーク」です。現在の月星化成の製品です。缶詰やビール瓶と一緒に出て来ました。日本に持って帰り、月星化成本社に送りましたら、本社に昭和 10 年代の物は無いとの事で、月星化成記念館に「ノモンハンの戦場で見つけた地下足袋のこはぜ」として展示してあるとの返事がありました。

9月2日焼骨式。焼骨、慰霊祭、追悼式、骨上げ、残骨をハルハ川に流す。

9月6日気温2度、ウランバートル空港から日本へ、午後2時成田空港着、気温32度、熱い、暑い。空港から専用バスで宿舎へ。ご遺骨を胸に抱き、語りながら、これが日本の東京ですよ、日本の生活はこのように豊かになりましたよと話しながら、翌日、厚労省にて遺骨引渡し式、厚労大臣より労いの言葉、日本遺族会で解団式、解散、遺骨収集の旅は無事終わりました。

戦後 26 年ぶり無言の帰郷（遺骨我が家へ帰る）

父との約束を果たすため戦中戦後、激動の中を生き抜いた母の労苦

浜松市遺族会 大石 功

父は昭和 19 年 6 月臨時召集を受け、横須賀海軍海兵団に入隊、その後霞ヶ浦海軍航空隊、松島航空基地隊にて基礎教育を受け、9 月母島海軍警備隊に配属。9 月 26 日盛安丸（輸送船）にて横浜港発。10 月 6 日父島着後、第 7 号輸送船にて母島着、入隊。任務に当るが昭和 20 年 8 月 15 日戦死（終戦の日）。

その後戦死公報が届く。

出征後、私達家族は空襲が激しくなり、町中より田舎へ仮疎開するが（母の実家）、戦死公報が届くやその生活は一変。幼子を抱え、女手一つで母の労苦は並大抵ではなく、「死にもの狂い」で育て、筆舌に尽くし難い。波瀾万丈、多事多難を乗り越える克己献身的な母の生き抜く強い信念と耐え忍ぶ背中（姿）は凄まじく、その形相は脳裏に焼き付き忘れません。いつも口癖、「いつまで有ると思うな親と金」・・・「親思う心に勝る親心」でした。

生活の糧として、母は昼一帖程ある「箆筒長持」より呉服（反物、着物、羽織、帯）を一枚二枚と交換しつつ、働き通しの毎日であった。父との約束は「子供を頼む」「体に気を付けて後を頼む」でありました。常に「子供は二十歳（成人）まで育てるのが私の責任。あと「外部」は自力で切り開いて行きなさい」、自らの使命、責任を全て遣り遂げ、将来を見据え、見届けるや急逝。40歳代半ばで旅立ってしまいました。早く楽をさせたい気持ちで一杯の中、突然でした。不思議なことで、その朝出掛ける時、常に言ったことはない「・・・ごめんね」が最後に交わした言葉でした。大切に胸に秘めており、感謝の一途です。

光陰矢の如し、4年が過ぎた昭和46年6月、東京都小笠原村母島評議平にて父の遺骨発見の報があり、関係先に確認をし、間違いないと連絡を頂きました。国、東京都、静岡県、市と関係者皆様方の丁寧なお運びの中、我が家へ帰還致しました。改めて葬儀を行う。当時、報道各社の取材は凄まじかったです（TV小川弘モーニングショー等々）。しかし、その場に母の姿はなく、遺影となりお迎えでした。骨壺一杯のご遺骨を一目見、胸に抱かせてあげたかった。申し訳なく残念でなりませんでした。写真でしか知らない私は、言葉が出ませんでした。家族と迎え、母（遺影）は仏壇の上より、優しい瞳より涙に溢れる香りが漂っていました。その夜は満天の星空。遠いはるか彼方より相見合わせ眺めているようでした。

○小笠原村母島評議平における遺骨収集に関し記載させていただきます。

母島における遺骨収集作業の経過及び

海軍母島警備隊戦没者仮埋葬地の状況等について

昭和43年6月、小笠原諸島返還早々、当時従軍した部隊関係者、遺族又は旧島民らに埋葬状況の情報提供と早期収容の要望があり、国に連絡する一方、東京都として昭和44年10月から現地調査を行い、情報による埋葬場所の確認を行ってきた。昭和45年1月国より遺骨収集事業の委託を受け、現地調査を実施する。昭和46年6月母島評議平仮埋葬地の発掘作業を実施。55柱（氏名

判明 46 柱) を収容。7 月東京都戦没者霊苑にて、遺族、部隊関係者参列のもと追悼式を挙行、遺骨の遺族への引き渡しを行った。

母島は、東京から 1,100km、父島から 50km 船で 3 時間余りのところにあり、緯度は沖縄より南に存している。面積は 21 km²である。当時、母島に島民は居住していない、無人島。島は 26 年の歳月が、島内を完全に熱帯植物が密生するジャングルと化し、当時の面影は全く見られない。仮埋葬地の評議平は海拔 90m 前後の高台の地形で、当時は海の見える見晴らしの良い所であったと思われる。

埋葬地に通じる道は、土地測量のため切り開いた山道しかなく、灌木が生い繁り歩行は極めて困難である。仮埋葬地の広さ 25m×40m 程あり、84 基の墓石が整然と列んでいる。灌木が密集し墓石は完全に覆われ、偶然一基の墓石を発見したことから、周囲を伐採していくうちに、次々と墓石が現れて、その全貌を掴むことができた程で、母島における仮埋葬地の発見は極めて難しい。墓石は現地ロース谷から採れる大谷石に似た軟らかい石でできており壊れやすいが、碑銘は立派な字体で完全に読み取ることができる。

当時の入口には、左側に「日本海軍墓地」、右側に「昭和 20 年 8 月 15 日着工 12 月 15 日竣工」と記入された石柱が建てられている。終戦までは木標であったが、戦後設営隊の技術者が刻み、石碑を建て整備したのである。評議平は警備隊本部や防空砲台が散在していた所で、今も高角砲が砲身を空に向けて立っているのが、戦場であった当時の酷しい情勢をしのばせている。

旧島民の帰郷に合わせ、姉と共に仮埋葬地を訪ね、思いの丈、積年の思いを語り尽くしました。色々な思いが走馬灯のように浮かび流れ、万感胸に迫り感無量でした。

合 掌